

平成29年(2017)

9月

No.926

# 広報 かこがわ

特集

伝統と革新が織り成す  
加古川の誇り。

## TOPICS

- 6 総合福祉会館がリニューアルオープン
- 8 ピックアップ情報
- 10 情報BOX
- 22 すまいるパーク
- 26 グラフ加古川
- 28 かがやくかこがわっ子

かん<sup>くにかね</sup>なで木材を削る国包建具の職人。長年培われてきた経験と技術が、伝統美を生み出します。



## 歴史とともに歩む国包建具くにかね

江戸時代に交通や木工業の要所として発展していた国包地区。現在でも職人が多く住み、約190年の歴史が受け継がれています。

職人の一人、秦幸造さんは、大正12年に創業した建具製作所の3代目。22歳で家業を継ぎ、技術を磨いてきました。「家に自分が作った建具がきれいに収まったときはうれしいですよ。新築のがらんとした空間が家らしくなる感覚は忘れられない」と話します。

## 職人が生きる「紙一重」の世界

建具は受注ごとに用途も寸法も異なるため、すべてオーダーメイド。また、障子をスムーズに開けるためには、図面の寸法よりもわずかに小さくする「遊び」が必要です。

木材を0.001mm単位で薄く削る、文字通り「紙一重」の世界。木の種類やさまざまな用途も熟知し、長年の経験で磨かれた職人の勘で、臨機応変に対応します。

## 伝統産業が生み出す未来への可能性

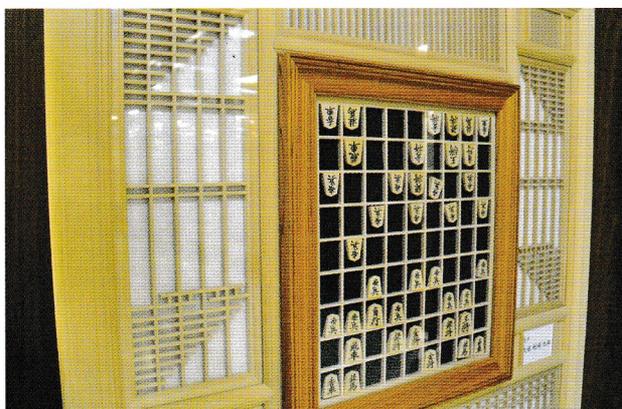
国包建具の特徴として名高いものが、釘を使わずに細かい木を組み合わせて模様を描く「組子」という技術です。

木材の一つ一つに角を落とす「面取り」を施し、微妙な角度を付けることで、より繊細な風合いと印象深い陰影を引き立てます。

幾何学模様やハスの花などを模した複雑な装飾があらわれた建具は美しく、芸術品としても高い価値を持っています。

組子を使った店舗の内装デザインを請け負ったときには、出来上がりが好評を博し、驚いたという秦さん。近年、欄間や高欄を付ける住居が減っている中で、伝統技術の新しい可能性を感じ、時計やカレンダー、将棋盤など独自のアイデアを盛り込んだものも手掛けています。「次はどんなものを作ろうか考えるのも楽しいですよ」。

百年以上使い続けられるものもあるほどの機能性と伝統美を持つ国包建具。大切に培われてきた技術を守りながら「時代や住む人に合わせて、暮らしにしっかりと落ち着くものを作り続けたい」と、職人は静かに語ります。



▲かがわ将棋プラザに設置されている秦さんの作品。

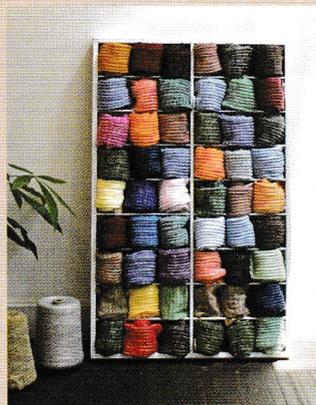
# 歴史

## 世界一と評された技術 「加古川の靴下」

加古川の地で靴下作りが始まったのは明治初期。志方町の住民が上海から手回しの靴下編み立て機を持ち帰り、製造を始めたことがきっかけといわれています。

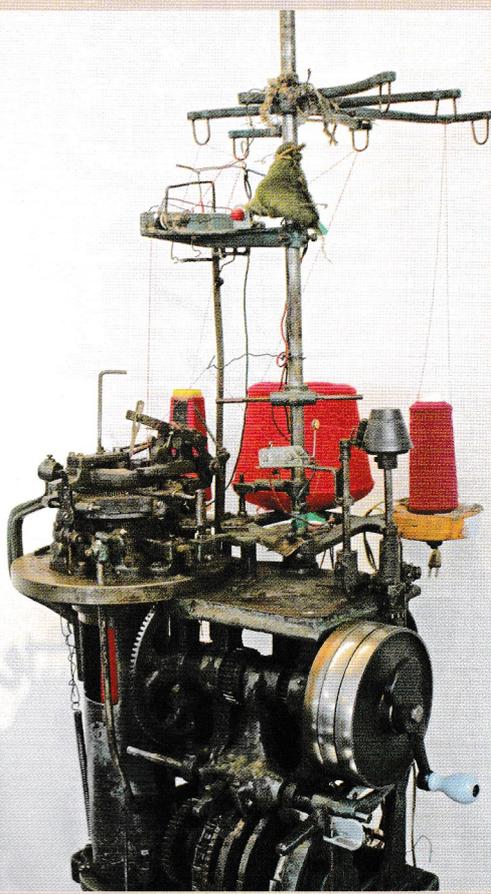
大正時代に入ると、当時生産量第1位であった東京が関東大震災により致命的な被害を受けたことや、自動編み立て機が輸入されたことなどにより、この地での靴下産業が急速に拡大。市を代表する産業として東南アジアや中国に輸出され、その技術は「世界一」と評されました。

その後、昭和初期の金融恐慌や戦争時の軍需産業化などにより、靴下産業は大きな打撃を受けましたが、加古川市は戦災から免れたため、他の産地より比較的早く立ち直ることができました。現在で



は、奈良県・東京都とともに全国の三大産地として、有名メーカーやブランド製品の生産を中心に展開しています。

少子化などによる国内消費の減少や低価格の輸入製品の急増など、厳しい局面を迎えています。海外製品にはまねできない高品質を強みに、カラーバリエーションやデザインを増やしたファッション性の高い商品、新素材を使った機能性の高い商品を開発するなど「加古川産靴下」としての挑戦が続いています。

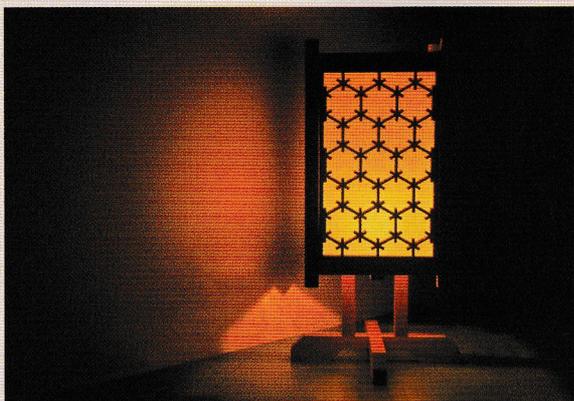


## 江戸時代から伝わる匠の技 「国包建具」

国包建具の発祥は江戸時代中期。かつて加古川を利用する高瀬舟の寄港地だった上荘町国包地区は、上流の北播磨地方から運ばれる木材などの集積地として栄えました。このため、集まった木材を切る木挽き職人が誕生、穀物から「もみ」や「ちり」を吹き分ける「唐箕」と呼ばれる農機具作りが始まり、それが建具作りへと発展したといわれています。

国包建具の特徴は、枠に釘を使わず、大小さまざまな長さの木材をパズルのように組み込む「組子」が生み出す独自のデザイン。その緻密な細工を可能にする職人技は、

全国建具展示会で表彰されるなど高い評価を受けています。その技術力の高さから、国包地区は、木工の産地・飛騨高山になぞらえて「西の高山」とも呼ばれています。住宅の洋風化などにより需要が減少している建具ですが、最近ではマンション用のドアや障子にその技術を使用したり、コースターや行燈、加古川マラソンのメダル入れを製作したりするなど、伝統の技が途絶えぬよう、多様な製品に生かされています。



# 文化